

TENTI TODAY 新聞記事から「ウランバートルのりんご」			1
受信メール 三通			2
会員の広場			4
随 想	2025 年に起きそうな事	臺 一郎	4
論 文	言論人 石橋湛山 (3)	篠塚 徹	5
歴 史	郷土意識の変容と地方出版人の使命 (4)	北林 昇	9
歴 史	「了解日本 (日本を知る)」(27) 日本人の二元構造 : 内と外、表と裏 (2)	兪 彭年	11
歴 史	E・ライシャワーの日本昭和史 (8)	津田 孚人	14
事務局			16

TENTI TODAY

新しい年を無事に迎えることができ、感謝です。願いは、この一年世界が平和であって欲しい、そして自然災害ができるだけ少なく、小さくあって欲しい、ことです。人間社会、賢明さを取り戻さないといけません。

9連休と騒がれた年末、年始でしたが、人の動きは鈍かったようです。インフルエンザ、コロナと感染症が再び勢いを増し、自重した正月を過ごされた方が多かったように見えました。箱根駅伝、天候に恵まれたせいもあってか、テレビで見る沿道の応援は、例年以上に盛り上がって見えました。コロナ前は、3日の午後、10区の最終ランナーをみに日比谷に出かけましたが、今年は、その元気が失せました。平穏無事で平和な日本、最高です。

気になった「新聞記事」

大相撲の初場所が始まりました。久しぶりに横綱・照ノ富士が土俵に上がり、モンゴル勢の役力士が、大関豊昇龍と二人になりました。その他のモンゴル勢は、平幕に霧島以下6名います。NHKTVの相撲中継は一場所15日間、年間6場所ありますから、90日間あります。この相撲中継で、アナウンサーは力士の出身地を紹介しますので、視聴者は、90日、年の約4分の一、「モンゴル国」の名を聞くことになります。仮に視聴率が10パーセントとすると、1千万人以上の日本人が「モンゴル国」を耳にしています。

12月29日の日経新聞朝刊文化欄に、最近のモンゴルの様子を書いた記事がありました。筆者は、国際政治学者の岩間陽子政策研究大学院大学教授です。日本人は、モンゴルについてもっと、関心をもつべきと思い、ご紹介させていただきます。

「ウランバートルのりんご」

1週間足らずのあわただしい旅だったが、モンゴルに行ってきた。百聞は一見に如かずという。やはり現地に行き、そこに住む人々の声に耳を傾けなければ分からないことは山ほどある。

かの地に降り立つと「Land-locked country」という英語が浮かんだ。辞書で引くと「内陸国」という訳が出てくる。それで間違いではないのだが、「陸に封印された国」という元の表現の重苦しさが消えてしまう。現代のモンゴルはまさに陸に封印された国だ。そして封印しているのがロシアと中国という厄介な隣国である。日本人も「ロシアや中国、北朝鮮を隣国に持つ我が国」という表現を使いたがるが、モンゴルとは隣国の意味が全く異なる。

モンゴルは日本の約4倍の領土に人口は345万人しかいない。それで北にロシア、南に中国と接する陸の国境は8220キロメートルに及ぶ。人口の約半分は首都ウランバートルに集まり、そのまた半分は都市インフラ外のいわゆる「ゲル地区」でテント生活を送る。グーグルマップの衛星写真でウランバートルの周縁部を拡大してもらいたい。白い小籠包のようなテントが無数に見えてくる。1人当たり国内総生産(GDP)は昨年5764ドル(約86万円)だが、まだまだ安定した中産階級が育ったとはいえない印象だった。

陸に封印された国の悲哀を最も感じたのがスーパーだ。商品棚には日本や韓国、ドイツ、ロシアの製品が並ぶ。モンゴルは肉と乳製品自給率が高いが、それ以外の食品の多くは輸入に頼る。ウクライナ戦争開始後、西側の対ロ制裁のために欧州からの物資の多くはロシア経由では入ってこなくなった。ベラルーシ、トルコ、中央アジア、中国など様々な迂回路を経て届くという。

スーパーで売られているリンゴは、なぜかポーランド産ばかりだった。戦争開始前、ポーランドのリンゴ農家にとってロシアは最大の顧客だった。行き場を失ったリンゴが、一体どうやってモンゴルにたどり着いたのか。可憐なリンゴは何も語らない。海からくる物資の荷揚げ港は天津だそうだ。物資が順調に届くかどうかは中国のご機嫌次第の面があるのだろう。新潟産こしひかりと韓国のりがスーパーの棚に並んでいる光景は、東アジアの平和が乱れれば一瞬で吹き飛びかねない。

つくづく周囲を海に囲まれる日本は恵まれていると思った。「日本には資源がない」というが、資源を外から運んでくるのは自由だ。「海が自由である」ことがいかに尊いか。対して陸は自由ではない。モンゴルに入るすべての物資はエネルギーからぜいたく品まで、ロシア領か中国領を通して来るしかない。

西側の対ロ制裁は、物流や金融の面でモンゴルをより強い対中依存に追いやっている。それでも民主化したモンゴルは絶対に共産主義や権威主義にもどることはない、現地の人々は胸を張る。「私たちは自由な遊牧の民(ノマド)だから」という表現を何度も聞いた。

モンゴルのナショナル・アイデンティティーはチンギス・ハンまで遡るが、20世紀は独立を求めての苦闘の連続だった。中国とソ連に支配された状態から、冷戦後に進めた民主化の大切さは国民に共有されていた。

しかし民主化を経ても2つの大国に囲まれた地理的な条件は変えられない。モンゴルは中ロ以外の「第三の隣国」を求め、欧州安保協力機構(OSCE)に加盟し、日本との関係も重視する。省庁や研究機関には、日本語を流ちょうに操る留学経験者が必ずいた。

「グローバル・サウス」を味方につけるにはどうすればいいのか。そのような大上段に構えた議論からは見えてこないものがある。私たちには、彼らがいる場所を変えるこ

とはできない。

そのことを分った上で、むしろモンゴルという場所の特異性を尊重することを考えるべきだろう。ロシア、中国、北朝鮮と友好的な外交関係を維持しつつ、日本との良い関係を切望している国などそんなにはない。

成田からの実質所用時間は行きが6時間、帰りはたった4時間半だった。ウランバートルからドイツも9時間にすぎない。ユーラシアの真ん中に位置するモンゴルは、世界に緊張緩和と対話のための場を提供する可能性を秘めている。陸に封印された国が保ってきた微妙なバランスを、私たちは自分たちにも貴重なものとして大切にすることを考えるべきだろう。

受信メール

一足飛びに冬が来た思いで、すっかり行動が鈍くなってしまい、我ながら情けないと、痛感しています。そんな中、562号においても、多くのことを学ばせて、いただき、有難く思っています。石橋湛山については、今までに、政界、言論での活躍につき、学ばせていただきましたが、昔から、それも戦時中でも、女性を尊重されていたことを知り、その先進性に感銘しました。ライシャワーにつきましては、先の大戦において、開戦前の日本の状況を、的確に把握していたことを知り、正直なところ、凄いと思いました。貴重な情報を頂き感謝しています。寒さも厳しくなりますので、皆様におかれましては、お体にご自愛いただきまして、良き新年を迎えられますことをお祈りいたします。(酒井さん)

天地ネットワークテーブル、また1年間お世話になりました。ありがとうございました。ぽつりぽつりと、友人知人が減って行きます。太極拳の老人仲間以外、もう増えることはありません。そんな中で変わらぬ持続力と、旺盛な探求力の皆さんの著作に目を開かれると言うか、蒙を啓かれる思いで楽しませて戴いています。

同じ出版社でも、文藝春秋や新潮社は、雑誌では社員編集者に記事を書かせる運用ですから、OBになってから、かなりの方が本を書きます。元社長だって書いています。それに対し、講談社や小学館では、もっぱら社外記者に原稿を依頼し、その取材展開・点検や進行管理に集中し(要は調理人か司令塔役)、自分で原稿用紙を埋める事はほとんどありませんでした。今となっては、『書く仕事』であつたら、また違った老後もあつたかな、と思ったりします。もうボケてどうにもなりません。

今年もあと2週間、無事に年越しを迎えられることを感謝すべきか。格別故障もありませんし。もう1年、もう1年と、どうかお元気でこの仕事を持続させて下さい。黙って読んで、楽しんでいる仲間も居ますから。お元気で。(寺島さん)

今年もつつがなく天地シニアネットワークの仕事を完遂されたこと、まことにご同慶の至りです。日本も寒暖の差が激しい気候になってしまい、四季の美しい移り変わりが楽しめなくなりましたが、来年もお元気で活躍されんことを祈ります。(相島さん)

会員の広場

2025 年に起きそうな事

臺 一郎 (75歳)

年初にあたり、2025 年に起きそうな事柄を予想してみた。あくまで筆者の個人的な予想である。また大前提としてトランプは 1 月 20 日に米国大統領に就任し、石破総理は少なくとも 1 月中は辞めてないものとした。基本的には世界各国や日本国内で起きる経済、社会、政治、文化等に関わることを書き、身の回りの個人的なことは一つだけにした。項目数は 20 個として、残りはその他として少し加えた。

身の回りのこと

今自分の身の回りのことで気になっているのは、同居している中学 3 年の孫の高校入試の事。殆どの高校入試は 2 月中なので、3 月中旬までには結果が出ている筈だ。僕が高校生だった頃と比べると、有名校としてリストに出る学校は半分くらい顔ぶれが変わっている。孫が受験する高校の中には自分の卒業校も含まれる。祖父としてはそこに合格し進学すると良いなと思うが、自分に出来ることは神頼みだけ。そこで最近国立市の谷保天満宮に行って祈願した。そこは学問の神様と言われる菅原道真公の息子が建てた神社なのだ。

世界や日本の事柄

さて以下は世界各国や日本国内で筆者が「起こるかな」とか、「そうなるだろう」と予想した事柄だ。根拠やヒントはメディアのニュース記事、SNSでの有識者の投稿原稿、学者の本の予測などが多い。単に筆者の思い込みも一部ある。基本的には順不同だが、少しだけ入れ替えをした。例えばトランプがらみを続けて並べるとか、前半に世界の事柄を、後半に国内の事柄を並べるとかだ。世界編では、今月 20 日に米国の大統領に就任するトランプ大統領がらみがとても多い。

- ① トランプ大統領は米国に製品輸出をする全ての国に 10%の関税をかける。但し中国には 60%、カナダとメキシコには 25%とする ⇒ 2025 年中には中国以外は中止・終了するだろう。米国経済への悪影響が大き過ぎるし、カナダ、メキシコとの関係が極端に悪化するから。
- ② トランプ大統領の強い要求で国防予算の対 GDP 比は、数年以内に NATO 加盟国は 5%、日本は 4%にすることを米国に約束 ⇒ 石破総理は早速増税の必要性を強調する。
- ③ トランプ大統領の強硬な対中経済政策により米中対立は先鋭化し陰悪化する ⇒ 他国への 10%関税は程なく中止するが、対中国は 2025 年中ずっと続行か。
- ④ トランプ大統領の仲介でウクライナとロシアの戦争は停戦が成立 ⇒ 歴史上の大戦は 4 年以上続くと当該国の国内で厭戦気分が急速に高まって停戦や終戦となったし、米国もウクライナへの軍事的経済的支援を止めるから。
- ⑤ イスラエルのガザ攻撃は 2025 年中も続行 ⇒ トランプ大統領は娘婿がイスラエル人で大のイスラエル虜。よってイスラエルの攻撃に歯止めをかけない。
- ⑥ カナダとの国境やメキシコとの国境から米国に入る不法移民数は激減する ⇒ トランプ政権は国境管理や入国審査を格段に厳しくするし、加・墨両国も国境管理を厳しくするだろうから。

- ⑦ トランプ大統領はイーロンマスクを陣営から追い出す ⇒ 両者の強すぎる性格や個性は必ず衝突を招くためにトランプ大統領はマスクと分かれる。
- ⑧ トランプ大統領によるディープステート潰しは結局、道半ばで断ち消える ⇒ 完全に潰すと連邦政府が回らなくなるし、マスクと分かれるから。但しディープステートの影響力は大幅に減衰化するだろう。
- ⑨ トランプ大統領は UFO と米軍の接触写真や動画記録を公開する ⇒ トランプは前回の政権時にも UFO 情報の公開を言っただけ、バイデン政権も存在を否定しなかった。
- ⑩ 米国の生成 AI ブームは年後半に一旦頭打ちに ⇒ AI サービス用のデータセンターや AI 用半導体工場の急増による電力需要の爆増に、電力供給が追いつかなくなる。
- ⑪ AI 用半導体のメーカーであるエヌビディア社の株価は 2025 年中にはピークを打つ ⇒ 前述の電力不足問題で AI ブームが一旦沈静化するため。
- ⑫ 欧米の EV 自動車ブームは完全に減衰化し、ハイブリッド車が主役になる ⇒ 今の EV 車はむしろ地球環境を破壊するとの認識が欧米で定着する。
- ⑬ 新型コロナもしくは新たな感染症のパンデミックが世界中で発生する ⇒ 中国では既に新しい感染症流行の兆しが始まっているとの非公式情報もある。
- ⑭ 中国の習近平は失脚したり 2025 年中に退任することはない ⇒ 人民解放軍との関係が不安定化していると言われるからクーデター騒ぎ等はあるだろう。
- ⑮ 中国の習近平は我が国を国賓訪問する ⇒ 石破政権が続いているか、立民との連立内閣になれば訪日招待をやりそう
- ⑯ ロシア経済が急速に悪化する ⇒ ウクライナとの開戦に伴う戦争経済でロシア経済はむしろ良くなったが、終戦で西側による経済制裁がハッキリと効き始める。
- ⑰ 北朝鮮は再びミサイル実験を活発化し核実験も再開する ⇒ ロシアとの軍事同盟国化によりロシアの高度で高性能なミサイル技術や核兵器技術が手に入るため。
- ⑱ 韓国は親日米の右派と親北中の左派の対立が先鋭化して騒乱状態になる ⇒ 感情的な国民性なのでユン大統領の弾劾が確定し刑務所への収監が行なわれると騒乱状態になりそう。
- ⑲ 石破内閣は 7 月の参議院選挙が終わるまで続く ⇒ 参議院選は自民が大敗し、石破総理は責任を取って辞める。もし負けが少なければ、しぶといので辞めない。
- ⑳ 海外から我が国を訪れるインバウンド人口は 4000 万人を超えない ⇒ オーバーツーリズムによる観光地環境の悪化や観光国としての魅力の低下による。

その他にも、《国民民主の 103 万円の壁の突破は自民と財務省の抵抗により 150 万円で決着》とか、《国内の大卒初任給は中堅以上と中小零細で格差が拡大し、大企業は 30 万円超え、中小零細は 25 万円が限度》とか、《7 月の参議院選挙で自民が大敗して石破総理が辞め、次の内閣は国民民主と自民の連立となって国民民主の玉木氏が総理になる》とか、《1 ドル 150 円台の円安が続く、日経平均は史上最高値を更新》とか、《知能化した人型ロボットの導入が様々な分野で増える》とかが想像される。

以上が 2025 年に起きることについての筆者の予想だが、たくさんの項目の中には「自分もそう思う」と同意される方の多い項目も結構あるかも知れない。

最後に世界編でトランプがらみがやたら多くなってしまったが、4年後にトランプ大統領が退任すると、米国の世界への影響力は、トランプが強引に乱暴にやった事のツケや反動で、想像以上に大きく低下するのかもしれない。21世紀は紛れもなく「パックス・アメリカナ」ではなく、「パックス・アジアナ」の時代なのだから。

言論人 石橋湛山 (3)

篠塚 徹 (83歳)

6 更生日本の進路

石橋湛山は、終戦直後に次に示す社論を執筆している<『石橋湛山評論集』(松尾)>。全文の2分の1程度を掲げる。

● 1945年8月25日号『東洋経済新報』「社論」

『更生日本の針路 更生日本の門出、前途は実に洋々たり』

8月8日のソ連の対日開戦宣言がそのまま翌9日東京において発表されたのを見て、記者はもはや戦争は終結に近づきたりと信じた。政府にその堅き決意があるにあらざれば、この文書は断じて発表し得べからざるものだからである。

しかし一応かくは信じて、なおその間に一抹の懸念を抱かないではなかった。それは一部の指導者中に、あるいは一時の感情に駆られ、あるいは当面の面目に捉われ、ために政府の右の決意の実行を妨ぐる者を生じはしないかということであった。

我が国の戦争の状況は、既に米英だけを相手としても遂行は不可能であった。口にこそ本土決戦を唱えたとはいえ、これによって能く戦勢を転換し得たと信じた者は、おそらく最高指導部中に一人もなかった。政府が早く7月26日以前にソ連を通じ和協を米英に求めた所以である。いわんやそのソ連までも新たに敵に加わり、あまつさえ恐るべき原子爆弾の出現をさえ見るに至った。もしこのままに戦争を継続するにおいては、我が国はおそらくナチドイツが蒙った以上の損害を受け、国土は徹底的に破壊され、一国としての政治的統一を喪うに至るであろう。

我が国とドイツとは根本的に国体を異にした。辱くも、上御一人の御聖断は神の如く、一切の議論を止揚し、戦争は終結された。而して今や万民心を一にして、更生日本の建設に邁進し得るの恵に浴すに至った。昭和20年8月14日は実に日本国民の永遠に記念すべき新日本門出の日である。

我が国は、なるほど従来領土の或る部分を失い、また軍備産業等にも制限を受けざるを得ない。しかしこれらがそもそも生々発展せんとする日本国民にとって何ほどの妨げをなそう。昭和20年8月14日を以て発展せる更生日本が、具体的にいかなる針路を取るべきかは、順次記者の意見を開陳しよう。しかし記者はここに一つの例を挙げて、かの米英支三国提示の対日条件の如きは何ら新日本の建設を妨げるものでないことを示そう。

それはほかでもない。最近米英が製作に成功した原子爆弾だ。これは今回の我が国の停戦の有力な一原因をなしたもののだが、しかし決してそれだけの事ではない。この爆弾の出現は、今日の世界のあらゆる兵器を無効ならしめた。今回の第二次世界戦に、あれだけ華々しき働きをなした飛行機さえも、この爆弾の前には半ば無用化した。原子爆弾を欲する地点に投下するにはただ一機の飛行機があれば足り、多数のそれは必要とせざるに至ったからである。

しからば原子爆弾とは何物であるか。それは科学の産物であり、頭脳の産児であ

る。しかるに米英支の三国の条件はもとより、およそ世にあらゆる人為的制限は、過去現在の産物を禁止しあるいは破壊する力を持つであろうが、人の頭脳の活動を禁止し、それより将来産まれ出づる物に対して制限を加える途はない。今日の軍事産業は、仮に将来戦争があるとしても、その際はもはや用なき産業であろう。それは第一次世界戦争においてドイツの軍備を制限したことが、何らドイツの戦争力を挫き得ず、第二次世界大戦の発生を防止できなかったことに顧みても明白である。

言うまでもなく日本国民は将来の戦争を望む者ではない。それどころか今後の日本は世界平和の戦士としてその全力を尽くさねばならぬ。ここにこそ更生日本の使命はあり、またかくてこそ偉大なる更生日本は建設されるであろう。

しかし原子爆弾の一例は、いかなる針路を日本が取るにしても、その着眼の要点を示すものである。率直に言えば、従来の我が国には、この着眼が足りなかった。竹槍こそ最も善き武器なりとする非科学的精神が瀰漫した。ここに戦争においても今回の不利を招いた根本原因があるが、平和の事業においても同様である。

単に物質的の意味でない科学精神に徹底せよ。しからば即ちいかなる悪条件の下にも、更生日本の前途は洋々たるものあること必然だ。記して以て更生日本の門出を祝す辞となす次第である。

増田弘は、「湛山は(秋田県)横手で日本敗戦の報に接すると、“考えてみるに、予はある意味において、日本の真の発展のために、米英等とともに、日本内部の悪逆と戦っていたのであった。今回の敗戦が、何等予に悲しみをもたらさざるゆえんである”と日記に記した。

他面、湛山は社論“更生日本の門出”を執筆し、戦後に処する基本姿勢を明らかにした。自らの戦後構想を実践すべき時期が到来したと確信したのである。(増田)」と記述している。敗戦を意気消沈して受けとめる知識人が多いなかで、敢然と前を向いて日本再生のためのスタートと位置づけた石橋の慧眼には脱帽する他はない。

7 自由党(後の自由民主党)からの立候補を選んだ理由

保阪正康は、文藝春秋 2024 年 8 月号「日本の地下水脈」連載記事第 45 回で、石橋湛山を採り上げている。

石橋について「個人主義とは異なる、国家にもイデオロギーにも従属しない”自己の確立“が人間主義の立場で、社会的な存在として描き出されている。湛山が主張する”自己の確立“とは、自らの生活に基づく自らの論理で、社会に対処するとの意味になるのではないだろうか。湛山の論理的基盤は、独学で経済や財政を学び、現実とせめぎ合う教養を身につけていく過程で獲得された信念であり、それが近代史から現代史へと続く生涯の通奏低音となっていることに私たちは留意すべきであろう。(保阪)」と論じている。

そのうえで、保阪は石橋が衆議院議員選挙に立候補するに当たっての政党選びのいきさつに触れている。

「湛山の論理的基盤は、イデオロギーとの向き合いにおいても、際立った作用を発揮している。戦後、政治家に転じる際、湛山のもとには、日本労働組合総同盟の会長であり日本社会党の政治家であった松岡駒吉などからも誘いがあったという。だが湛山は、それまで縁のなかった自由党から衆議院議員選挙に立候補するのである。その理由を、自由党、進歩党、社会党の三党を比較すると、自由党が最も自分の主張に耳を傾けてくれそうだったからだ」と端的に述べている。／

く社会党は、いわゆる社会主義に束縛されて、思想の自由を欠いているように見えるし、進歩党は、また当時、妙な統制経済を唱えておって、とうてい私は一緒に行

けそうではなかった。これに反し、自由党は最右翼の保守党というように、世間の一部からは見られ、共産党あたりからは目のかたきにされていたが、しかし私は、思想の自由は、ここに一番多くあると考えた。『湛山回想』>

／帝国主義を批判する際に、イデオロギーによらず実証的な手法でその”不経済“を暴いた湛山は、イデオロギーの制約を受けずに、自立した私の言うべきことを言うという態度を曲げなかった。政治家としても”思想の自由“を重視して、自らの政治姿勢を貫いたのである。(保阪)」

なお、保阪は「付言すると、ここで湛山がスケッチした自由党の“自由度”は、ある時期までの自民党の党風にも当てはまる面があったと思われるが、近年、著しく失われていることを指摘しておきたい。(保阪)」と現在の自民党に苦言を呈している。

小島直記は『異端の言説』において、石橋の政党選びの理由に上述の『湛山回想』を引用している。

上田美和は、戦前の硬骨の小日本主義者石橋が、戦後なぜ“保守党”の政治家になったかについて、多くの政治史研究の学者による先行論文も参照しながら、多角的に論じている。この点について、本稿では深く立ち入らないが、上田は、言論人時代と政治家時代をいかにして連続的に論じるかは、言論人から政治家へという石橋の転身から生じる分析の断層、つまり混沌とした政治活動のなかに思想なるものを追跡することの困難さがあるゆえに依然として難しい課題であるとしながらも、課題の設定の仕方と従来の研究で未使用の史料の導入によって、言論人時代と政治家時代を連続的に論じることが、必ずしも不可能ではないと考えている。

8 結びに代えて

石橋湛山は、1947年5月に公職追放処分に遭い、1951年6月の追放解除まで、政界の表舞台からの退出を余儀なくされた。戦時中の軍部等への抵抗から見て、実に不可解な追放処分であったが、その真相（GHQの方針の不当性、吉田茂との確執など）については、多くの研究者によって詳細に論じられており、本稿ではあえて触れないことにする。

最後に文入努（ふみいりつとむ）著の『石橋湛山における小日本主義の蹉跌 それ はリアリズムであったのか？』を話題にしたい。本書は2021年に出版されており、私が今夏集中的に読んだ著作は、すべてそれ以前の出版だから、当然それらの著者は文入の著作を目にしていらない。

だが、文入は2002年に『小日本主義はリアリズムであったか 石橋湛山における思想構造の研究』（本の風景社）を出版しており、本稿で対象とした著作の著者・編者である半藤、矢沢、上田は文入の古い方の著作を目にすることができた筈である。

ところが、彼らの著書・編著書には文入の著書は参考文献としてまったく出てこない。文入によれば、「大学生の時石橋の評論集を読んだが、その感想は、国内政治については現在でも通用するような進歩的な考え方だと感じた。しかし、植民地放棄論に代表される対外政策の主張については、非現実的との印象をもった。(文入)」という。

「やがて、湛山が保守から革新までの広い層から高い評価を受け、リアリストであるとの評まであることを知ることになったが、どうしても違和感を拭うことができなかった。(文入)」その結果研究を続けて産まれたのが、上述の2つの著作である。

文入は石橋の多くの論文を、植民地放棄論、対外認識、貿易と国際資本移動、産業政策、国際政治の観点から分析し、矛盾点、視点の欠如等を細かく指摘している。

そのうえで「湛山の議論の特徴をあえて簡潔にまとめると、それは状況認識における楽観主義的傾向と政策提言におけるオール・オア・ナッシング的な硬直性といえるであろう。そしてそれは、湛山の思考様式の演繹的ないしは原理主義的な性格から派生したものである。(文入)」と断じている。

しかし、文入の著書が参照文献としてもなぜ石橋湛山研究者から採り上げられないのであろうか。私なりに解釈すると、石橋が常に挑み続けた非常に大きな時代背景のなかでの日本の生き方と国際平和を希求する基本姿勢に対して文入が行っている細かい個別分析が、研究者によって受容できない要因になっているのではなかろうか。(文中 敬称略)

2024 年 8 月

郷土意識の変容と地方出版人の使命(4)

北林 昇(長野県飯田市在住 76歳)

5)郷土出版の有様を見直す

ここで郷土出版、並びに郷土研究者の有様が、読者の減少さらに地域の文化主体の衰弱を招いたことを自省しなければならない。以下に郷土研究とその出版に実情を掘り下げて見ることにする。

郷土史研究家や教育者は、これまでの行政目的の地方史研究の流れを踏襲したが、他方、地域についての宗教史、産業史、文化史についての研究がほとんどなく、地域民衆生活の全体像が見えてこない。全国レベルでも宗教史、美術史、芸能史、文学史などはあっても日本文化全般にわたる通史はたった一冊(『講座日本文化史8巻』)三一書房／絶版)しかない。

それと郷土史研究が、交易など関係の深い隣県をはじめ他県までの考察、研究が及ばないし、研究者相互の交流も少なくお国自慢に終始して、同じ県でさえも他地域のことは関心が弱く、地方の歴史事象を全国史に位置付けて地方史からの日本史を語れず、民衆史のダイナミズムが表現されていない。

こうしたなか刮目すべきは、三澤勝衛氏が『風土産業』(1941刊)で、風土性を科学的に究明して「適地適業」を推進、今日の「地域内循環型経済」に通じる業績を残したことである。

また飯田出身の日本近代史研究の先達古島敏雄氏は、全国的視野から地方の歴史事象を広域でとらえた『信州中馬の研究』(1944発行)が特筆される。中馬交通が東海地方と内陸の交易にとどまらないで、幕末外国船の襲来のなか海上交通が危ぶまれ、日本の東西を結ぶ重要な交通路であったことに論及している。また、正木敬二氏が、江戸末期から明治にかけての交易の盛衰を詳細にまとめている(『東海と伊那』)。

ところで平成の時代のはじまりと前後して、各地の公民館などで昭和の時代を回顧する民衆の記録出版活動—『古老は語る』『丘の語り部』『ふるさとへの伝言』『語りつぐ伊那の女』など—が、ひところ盛んとなった。私も数か所の公民館や教育委員会、婦人会による出版を手伝ったが、その内容は先の戦争体験の食べ物が不足したなど苦労話一色だった。

なぜその一方で、養蚕から果樹生産など園芸農業への転換、凍り豆腐産業など農家組合から近代工業への進展、疎開工場から精密工業が根づいたこと等々、注目されるべき郷土の先達たちの産業革新について語り継ごうとしなかったのだろうか。

ただ塩沢仁治氏の労作『果樹園芸史—果樹栽培の始まり／松川町大島』は、養蚕全盛期の当地にあって、消毒を必要とする果樹栽培は荒れた山地を開墾した、と書いている。この挑戦があったからこそ製糸業不況下を乗り越え今日の下伊那の果樹王国がある。

そこで芳賀登氏の「とかく個別化し専門分化して相互にかかわりあう部分を欠落させがちな今日の学問状況にあっては、個別史的な記述のみが多く、文芸・芸能の底にあるものを明らかにする学が少ない。したがって高名な人を集めて編纂した県・市町村史は、地元の人々に語りかける力をもたない。土に生きる人々に祖先以来語りつづけられてきた精神や倫理や智慧や苦闘がどこにも書かれていない歴史からどれが何を学び得るであろうか。そもそもそれが本来の歴史と言えるものであろうか。その結果、土地に生きる人々の心には心の空洞をあけたままにしている。」(『地方史の思想』)との問いかけが重くのしかかる。

このように、民衆の実情から離れた資料研究に特化した地方史や地方出版の経過を考えると、このままでは地域住民の主体性の構築、地域文化の再生は期待しようもない。

そこでこの事態に一石を投じたいと郷土史のみならず全国史、県史、隣県史、県境を越えた市町村史、そのほか産業、文化全般にわたる膨大な資料を各地の図書館、博物館、郷土資料館、美術館などに出向いて集め、それらをもとに各分野の全国史をベースに総合化した年表を起こした。歴史事象が重なって見えてきて想像力が働き、多くの発見があった。

なかでも特筆すべきは、私の育った信州飯田地方が、東山道・飯田街道を横道に秋葉道(中央構造線)・遠州街道・伊那街道・千国街道(糸魚川静岡構造線)を縦道に、歴史の十字路として、縄文・弥生・古代・中世・近世に亘って、信仰の道、交易の道、戦いの道、芸能や茶の湯など文化伝播の道など、日本の東西南北文化交流の交叉点で、地域間交流が盛んであったことが見えてきたことである。

それから出版企画の内容と対象地域の範囲が広がり、折しも特急乗り入れに伴う飯田線の百年史、三遠南信自動車道の開設での三河・遠江・信濃を紹介する『三遠信』4巻の企画出版、さらに開通に伴う記念誌『権兵衛街道』、八十二文化財団よりの編集委託の『信州水系圏を行く』、「日本歴史の十字路を行く」とつづいた。

この三遠信十字路紀行は、折しも浜松・豊橋と飯田を結ぶ三遠南信自動車道・中央リニア新幹線が着工するなか、これからの地域の未来にとって大いに指針となるものと思い意気込んだ。

ところが、これまでの郷土出版と違い広域にわたったことで、郷土のことが網羅されず、お国自慢話を期待する読者の気持ちに応えられなかったこと、また専門化した郷土史研究者に応える詳細な史実や新たな歴史事象の記述がなかったこと、総じてこれまでの読者が高齢化していたこと、加えて内容が重くなったのか、読者を開拓できず、いままでの地域の読者にも受け入れられなかった。

他方、全国の地方大学図書館の注文が多かったが、それでも100冊程度の売り上げで資金繰りに窮し、全4巻の企画が2巻で中断に至ってしまった。

もはや地域には読者はいなかったのか。読者はいたが、民衆視点からの歴史の全体像を描こうと、各分野を関連付け総合化、広域化にすすんだものの、現在の生活者の生活実感に呼応、地域の人々に語りつづける編集出版スタイルが取れなかった、のである。

これまでの地方史研究とその地方出版の現状からは、日本史とも深くかかわりあ

っている地域の歴史のダイナミズム、ましてや現代に通じる地域民衆のドラマを生き生きと描けていない。次第に地域の生活感覚から離れ、「郷土史マニアの世界」と揶揄されてしまった。

そこで、大方の地方出版社は、地域の人々の生活感覚を捉えられず、その読者から見放され、観光案内やグルメ案内といった消費社会に呼応した広告媒体誌が中心となった。

6) 地域の内発的創造力を育む出版へ

なぜ、在来技術を磨いてきている技術者たちの想いを子供たちに語りつなげることを憚ったのか。それは私自身の本の販売体験から地方の文化や産業の担い手の人々の多くが、欧米の知識や技術をいかに速く取り入れるかに心が向き、地域の在来技術や文化を育んできた歩みを子供たちに繋げようとしなかったからだと思われる。

今日、日本の経済の成長率が先進国の中で最低となり、地域産業の自律的成長が低下している原因は、輸入技術や文化を重んじ地域の内発的創造力が十分発揮されなかったことにある。

欧米の機械設備の輸入で世界市場を制覇できた量産の時代は終わった。これからは持続可能な社会へ、頻発する災害から生活を護り、CO₂・プラごみ削減など環境保全に貢献する再生可能なエネルギーや新素材の開発、生活の用途に応じて少量生産ながら使い勝手が良い丈夫で高い精度の品質を提供するなど、多様化する社会ニーズにフレキシブルに対応できるローカル産業技術を育むことが地域の再生に不可避となってきている。

こうした地域再生について、この先、地域の産業や文化が持続して育まれ、豊饒な地域となるかどうかは、地域社会のニーズに応え、未来の生産を担う農業や工業技術者、そして地域主導で市場を開拓する商人を育てていけるかどうかで決まる。そのために地域出版は、地域の産業や文化の内発的創造力⇒地域アイデンティティ⇒コミュニティ・レジリエンスを育むことに生かされるものでなければならない。

これこそが、地方出版の本来あるべき姿、そして出版に携わる人間の使命、と想い上梓させていただきます。(了)

「了解日本」(「日本を知る」(2019年出版)
(27)

兪彭年 (87歳)

日本人の二元構造：内と外、表と裏(2)

＜日本人は内と外を区別する感覚が強い＞

日本人は表と裏を区別する意識が強く、物に表と裏があるように、人にも表と裏があり、言うことにも表と裏があり、付き合いの上でも異なる場面で異なる話をするようだ。表面的な話(日本語では「建前」、中国語では一般的に「原則」、「方針」などに訳されている)は、対外的にオープンにされており、話し手の体裁を作る話であり、日本人はそれを非常に重視している。その中の言葉(日本語では「本音」と言う)は、オープンにさせず、心の中に置いておく。

うわべだけの話(建前)は、外面的なものであるため、一般的には聞こえがよく、美しく、社会規範に合致し、社会上の常識、慣行、常情を反映しているが、したがって、現実の程度とは異なり、一部は体裁のための完全表面的なものになっている。本音は心の中にあるので、はばかることなく、隠すことなく、本心から出た赤裸々な考え

です。

日本人はこの 2 種類の話が社会生活の中で不可欠だと思っている。建前の中にも本音があり、もし建前がなくて、すべて本音となるとプライバシーがなくなり、人間関係がむき出しになり、非常に不便で、更に摩擦が発生する。だから“表の話”は人間の潤滑油の作用を果たすことができ、個人の隠れ蓑の作用となる。日本人は表と裏は違うはずだと思っている。表裏一体ではなく、場合によって使い分けるべきで、肝心なのは場面によって適切に使うことだ、と思っている。

筆者は長年日本人と付き合ってきて、日本人は確かにこの 2 つの言葉を使い分けていることを深く経験してきた。私たち外国人にとって重要なのは、どの言葉が建前で、どの言葉が本音の言葉か、日本社会の様々なルールに慣れていないと、建前を本音にしがちになることです。

例えば、日本人は中国人の初期段階の翻訳者によく言います：「あなたの日本語はとても上手で、まるで日本人と同じですね」。これは典型的な表面的な褒め言葉で、聞こえもいいし、綺麗だが、現実には差し引いてとらえることが必要で、我々中国人はこの話をお世辞と定義している。また、日本人はよく中国人の若い女性翻訳者に対して、誰であっても「あなたは本当にきれいですね」と言います。これも典型的な表面的な言葉であり、当事者は決して真に受けることはできません。

私たち中国人の言う褒め言葉は、日本人にとって礼儀正しい表面的な言葉であり、人間関係を潤滑にすることができ、聞き手の日本人は喜んで、少なくとも怒らない。また、日本人はよく、今度私の家に来てくださいと言うが、これらの言葉は、ほぼ礼儀正しい表面的な話であり、本音の話として聞いてはいけない。我々中国人に対して感じよく丁寧に失礼のないように話をしているだけです。本当であるなら、相手はあなたを招待する具体的な時間を明確にするのが普通である。もし聞いた人が、あなたをお客様として招待するという表面的な話を本音の話として、うっかり相手に具体的な時間を聞くと、相手は当惑し、無知だと思ってしまう。

表面的な言葉にはいろいろあるが、一つは理想、原則、方針など堂々としたもので、言葉は美しく、隙がなく、見栄えがよい。しかし、可能かどうかは考慮されていないので、聞いた人は信じられないだろう。

例えば「光明磊落」、「光明正大」、「和光同塵」、「居安思危」など自分を励ます座右の銘として自分が崇拝したり尊敬したりする有名人、偉人の言葉などを日本人は使う。

理念と価値も表面的な話であり、例えば日本の茶道の理念である「和敬静寂」は、「民主、自由、人権」などである。日本人は中国を見学訪問し、中国でよく言及されている「老有所養、老有所医、老有所為、老有所学、老有所楽」、「**自発的に**席を譲り、老いても若いものの世話をする」などの言葉を知るが、日本人から見ればこれは理想と目標の表面的な話であり、いつ、どのように実行すればよいかは真剣に考えない。

彼らはいつできるか、どのようにするかなどの表面的な言葉としては、現実生活の中で何かの目的を達成するために、例えば、店側が「大安売り」「大感謝」「バーゲンセール」「赤字覚悟」、「限定特典商品」、「お客様還元大放送」などしょっちゅうやるが、広告はずべて顧客を引き付けることを目的としているのであって表面的なものにすぎない。広告を見た顧客が、どれだけの特典を得ることができ、どれだけ満足することができるか、についての理解は、顧客それぞれの勝手によるのである。当然のことながら、店側は独自の内部用語を持っている。顧客用と店舗用の用語の違いは、

商人と顧客の暗黙の了解である。

表面的な言葉（建前）と内側の言葉（本音）の区別は、絶対的なものではない。人によって状況に応じて変化する。ある人にとって表面的な言葉が、別の人にとっては内側の言葉になるかもしれない。この場合、内側の言葉は別の状況では表面的な言葉になるかもしれない。現実の日本社会には、表面重視で理想や道徳を重んじる理想型の人もいれば、内面重視で実践的で利益重視の人もいる。この 2 つのタイプの中間の人もいて、人によって、場合によって言い方も異なるのである。

過去に日本がアジアを侵略した際に悪名高い「従軍慰安婦」を作って皇軍に性奴隷にしたことについて、1993 年に河野洋平内閣官房長官の発言があった。この発言は皇軍に「従軍慰安婦」があったことを認め、被害者に謝罪し、日本政府が責任を負うと表明したが、国際的には一般的に日本の建前とされている。

2007 年、当時の安倍晋三首相もこの件に関する演説を行った。その演説は、日本軍に「慰安婦」がいたことを否定し、河野洋平の演説を覆した。この演説は、一般的に日本の右翼勢力の本音であると考えられているが、対外的には、この内側の発言は、表面的な言葉と見なされている。

2008 年、「リアル近代史観」をテーマにしたエッセイコンテストに、自衛隊航空幕僚長（空軍参謀総長に相当）の田母神俊雄が応募し、最優秀賞を受賞、賞金 300 万円を得た。そのエッセイの中で、田母神は、日本の対中侵略と朝鮮半島の植民地支配は「条約に従って行動した」と述べ、過去に中国に駐留していた日本軍は、安保条約に従って日本に駐留している米軍と同じと論じた。

日本のマスコミがこの件を報じた途端に世論が騒ぎ、政府は田母神の交代を余儀なくされ、野党から批判を受けた。侵略の歴史的事実を否定する田母神の見解は、実は日本の右翼勢力の一貫した見解であり、内部の言葉に属する一貫した見解を表面的な言葉として発表し、結果として非難された。世論によって、つまり彼は場を見て話をする規則に従わず、本音を直接吐露した。日本の歴史教科書問題の本質は同じであり、右翼勢力は侵略史実について表面的な発言を好まず、侵略史実を否定し、侵略戦争を美化する。しかし、表現を変えて彼らの中の話の表面的な話になっている。

人にはそれぞれ表面上と内面の言葉があり、どの社会にもそれぞれの表面上と内面の言葉があり、表面と内面の言葉は時代の変化や状況の変化とともに変化する。様々な時代の日本社会の表面と内面の言葉を研究することは、様々な時代の日本社会を理解し理解する上で大きく役立つはずである。

過去の日本では、日本語の「義理」（中国語に正確な翻訳はない）は、表面的な言葉と見なされ、日本語の「人情」では、人間として「義理」を言うことを提唱していた。たとえば、仮に自分の名声や財産を傷つけたり、望んでいないことであっても、人々は「正義」について語るべき、つまり愛情、理性、友情について語るべきだということになる。「人情」は外に出してならず、心に留めなければならない。

今日、「義理人情」は封建的な倫理と道徳として批判され、脇に追いやられているが、「義理人情」の時代を懐かしむ人も多い。社会は非常に人間的で、人々は互いに気にかけている。互いに助け合い、調和して生きている。

日本の軍国主義時代、「国のために命を犠牲にする」「無私の献身」は、全国的に広く宣伝された表面的な言葉だった。実際は、統治者は庶民から特化して統治者自身が必ずしもそうではなく、当然ながら庶民にも面従腹背という本音の言葉があった。

日本の明治時代の啓蒙思想家、福沢諭吉は、著書『日本人と西洋人の内外表裏の違い』の中で以下のように述べている。

西洋のものと日本のものを比較すると、西洋人は表面重厚だが裏面は軽く、物の外見は精緻に作られているが裏地と裏面は粗く、例えば鏡の表面はきれいで、金を入れているものもあるが、裏面は粗く、ざらざらした板だけだった。また服のように、外見は洗練されているが、裏地は普通、家を作ると外見にこだわるが、中はそれほど凝っていない。

日本のものは表裏ともに洗練されており、人によって見られないからいい加減に作ることはなく、逆に上品さを見せるために背面や裏地のところに工夫を多くし、より丁寧に作る。家を建てる時には、家の内部は非常にこだわりがあるが、家の外見はそれほどこだわらない。(2010年5月10日)

E・ライシャワーの日本昭和史(8)

津田 孚人(87歳)

:「ライシャワーの昭和史・ジョージ・R・パッカー著・森山直美訳、講談社」より

ライシャワーのもう一つの懸念は、日系アメリカ人の扱いにかんするものでした。ライシャワーは、西海岸に住む日系人が一斉に検挙され、收容されることを予見し、それがいかに不当なものか知っていた。彼は、日系人として愛国心のあるアメリカ人であり、どの社会も日系人に対して敬意をもって扱わねばならない、と警告したが、その警告も顧みられず、12万人以上のアメリカに忠誠心をもつ日系アメリカ人が、西海岸の故郷や農場から遠く離れた收容所へ連行、隔離された。

この残酷な抑留政策は、アメリカ史の汚点として残され、戦後1983年になって、連邦委員会は、適切な法手続きを経ずに実行された日系人の大量拘禁は、軍事上の必要性によって正当化されるものではなく、真の動機は、人種偏見、戦争による病的な興奮状態、政治リーダーシップの失敗だった、と結論づけている。

1942年、ライシャワーは、日系アメリカ人はアメリカ軍隊内に独自の部隊を結成し、アメリカに対する忠誠心を証明することができるようにした方がよい、とも主張し、家族が監禁中の日系アメリカ人が多くを占めた陸軍第442連隊は、イタリア、フランス、北アフリカ戦線を戦い、アメリカの軍事史上もっとも多くの勲章を受けた部隊として名を残した。

ライシャワーは、12月、政策文書を書き、心理戦と降伏を勧める宣伝工作にかんする次のような助言をしている。

「降伏勧告の宣伝工作は、日本兵が死に直面した状況に限ること、指揮官だけを狙って行うこと、自己保持本能を強調するのではなく、戦後、祖国へ奉仕することを考えて部下の命を救え」と説くべきべきであるとし、自衛本能を呼び起こすような働きかけは効き目がない、国に対するより深い愛情と国の将来の安寧を願う気持ちに従って行動するように迫るほうがより効果的だと伝えた。

そして、日本には、ラジオの短波放送などで情報を得ている理性的な指導者層が数百人はいる。そういう人たちに対して信頼できる戦況、公式文書の全文、まじめな文化的な番組を送るならば、日本の勝利はありえないという「理性的な主張」と、戦後の世界秩序についての「道理をわきまえた提案」に気持ちが動かされるはずだ、と伝えた。

しかし、当時のアメリカの公式プロパガンダが、「狂信的な軍国主義者からなる国」という日本像を作っていたときであり、「日本の指導者の理性と常識を信じる」という

彼の主張は、アメリカ国内の時流にはまったく通用しなかった。

彼は、太平洋戦争の間のアメリカの辛辣なプロパガンダが、今後数十年間にわたって日本人に対するアメリカ人の憎しみをますます増幅させ、報復的な占領につながることを非常に心配した。1945年にフランク・キャブラが米陸軍省の要請で制作したプロパガンダ映画『汝の敵を知れ (Know Your Enemy—Japan)』は、プロパガンダと人種偏見の”傑作”であり、「個人としてのアイデンティティがない国民＝日本人」という印象を強めていた。解説では『一つの考えしかない従順な大衆』という表現まで使われていた。

1945年を迎えたときには、バーンズ国務長官、アチソン国務次官、モーゲンソー財務長官、などワシントンのおもだった発言者は、敗北した日本に対する懲罰的政策を遠慮なく擁護していた。そのシナリオで悪役にされたのは、天皇ヒロヒトで、ヒトラーやムッソリニーと同等に扱われるべきだとされていた。

1942年以降、ライシャワーは、日本の天皇制の性格をアメリカの政策立案者に教えるために不断の努力を重ねた。同年、国務省の政策立案者に宛てた文書では次のように明言している。

「天皇に責任がないことは日本の全国民が重々承知している。彼を否定するのは国旗を非難するようなものである。日本の本当のリーダーの存在は匿名のままであり、責任を負わせる当事者は存在しない。たとえスケープゴートに使える大物の個人がいたとしても、ごくわずかしかない。陸軍は、間違った指導者、かつ悪魔としてあげられる唯一の機関であろうが、ほとんど全国民がいまや何らかの形で陸軍と一体化しており、軍人に敬意を払うという長い伝統があるために、日本人は自国の軍隊を攻撃することで満足感を得ることはない。それどころか、軍事的な敗北は、日本の軍事政権の打倒よりもむしろ強化につながる」。

そして、日本国民の協力をかち得るよう周到に考えられた戦略を示唆して、こう述べている。

「日本自体がわれわれの戦略にかなう、考えられる限り最上の傀儡をつくり出している。われわれの味方に引き入れることが出来るだけでなく、巨大な権威を伴う傀儡である。私が言いたいのは、もちろん日本の天皇のことである。彼が生涯の多くの期間に得た教育および交友関係から、日本での評価基準に照らして、彼はリベラルで心から平和を愛する人であると判断できる十分な理由がある」。

ライシャワーの信条は、彼の妻の両親・ダントン夫妻に送った私信に、より明白に表れている。ダントン夫妻は、数年間中国に暮らしたことがあり、天皇に対しては否定的感情を持っていた。彼は、次のように述べている。

「ダントン家のご意見につきましては、個々のご意見でなく、それが相当に情報を得ている人たち、とくに極東についてかなり知識のある人たちのあいだで優勢になっているという点で、非常に心が痛みます」。

しかし、自分の両親や、有力な知人、専門家たちで日本を本当によく知っている人たちは、天皇には手を触れない、という考え方でほぼ一致しています。天皇に神のような威厳があるかぎり、われわれがどう望もうと、退位させることはできません。

天皇その人自体は重要ではありません。概念が必要なのです。現実の天皇をわれわれが退位させるならば、日本人は皇位という概念を、より一層大切に心に抱くことになるでしょう。概念というものは、人間よりも攻撃するのが、よほど難しいのです。

さらに言えば、そのような性急な動きを起こせば、日本人は何世紀にもわたり、皇位の諸悪を負うことになります。アウトサイダーがそれを剥奪しようとみたなら、すべて

の日本人が守る側に回るでしょう。皇位の悪弊を日本で廃止できる唯一の道は、その仮面をはぐことであり、退位させることではありません。天皇を殉教者にしたなら、仮面をはぐことは難しくなります。

過去20年間、軍国主義に対する第一の反対勢力は、皇位（すなわち天皇自身の人格よりも、むしろ助言者たちの人格）でした。猛威を振るった軍国主義の最善の抑止力の役目を過去に日本ではたした制度をとりあげて、それを廃止するべきでしょうか」。

そして、手紙の末尾には、次のように書き加えられていた。

「じつは、天皇がこの戦争を引き起こした軍人たちの行動を否定して、急速な復興へと日本を先導してくれることをかなり期待しています。私たちが知るかぎりでは、天皇は、日本の高位にあるだれにも負けぬほどリベラルな人です。これから数十年のうちに国家グループのなかで日本をまともな地位へもどすべく先頭に立つ、機関ないし人物がほかに現れるとは思えませんし、もし日本がすぐに復帰しなければ、私たちはこの国を運営するか、少なくともしっかり管理するという長期的な仕事を負わされるでしょう」。

ライシャワーの助言が「如何に賢明だったか」は、1945年8月30日、マッカーサー元帥が、一発の銃撃をうけることもなく、厚木に降り立ったとき、明らかになった。日本国民全体が、8月15日の天皇の「たえがたきをたえ、しのびがたきをしのび・・・」という降伏命令に従ったのです。（つづく）

天地シニアネットワーク事務局 （津田 孚人）

住所：〒116-0001荒川区町屋3-2-1

ライオンズプラザ町屋703

メールアドレス：tentisenior06@gmail.com

電話（携帯）：090-2534-1316